

トルコにおける新教育課程での社会科教育の展開

－教科「社会科」の指導書を手がかりに－（２）

社会科教育講座（社会科教育） 西脇 保幸

The Practice of Social Studies Education in Turkey's New Curriculum (2)

Yasuyuki NISHIWAKI

目次

1. はじめに
2. 新教育課程の方針と教科「社会科」の展開
 - 2-1 新教育課程の方針
 - 2-2 教科「社会科」の展開
3. 「社会科」指導書にみる授業の構想
 - 3-1 「社会科」学習材と教師用指導書の構成
 - 3-2 4年生「第2単元：私の過去を学んでいます」（以下本号）
 - 3-3 5年生「第8単元：私たちみんなの世界」
 - 3-4 6年生「第3単元：私たちの国の資源」
 - 3-5 7年生「第3単元：トルコ史の旅」
4. 新教育課程による社会科教育の課題
5. おわりに

3-2 4年生「第2単元：私の過去を学んでいます」

（本単元の概要）

指導書の本単元導入頁に示される概要によると、本単元で習得される目標は、1. オーラル・ヒストリーの手段を用いて事物をもとに家族史を構成すること、2. 家族や身近なところで民族文化を映し出している諸要素に気付くこと、3. 歴史上トルコ人が流行として踊ってきた舞踊から今日でも持続しているものの例を挙げること、4. 文化の諸要素が過去から現在まで変わりながら継続されてきたことに関して、身近なところからその論拠となるものを示すこと、5. 実際にあった出来事や視覚的な資料から国民闘争過程下の地元やトルコを記述すること、6. 国民闘争の勝利や共和国宣言でのアタテュルクの役割に気付くことであるが、これらの他にアタテュルク主義に関連し、社会生活での連帯の重要性や彼が国民文化を重視したことを把握できることなどを挙げている。

（小単元「私たちは家族の歴史を書いています」：単元目標 1、教科書 4 頁、2 校時展開）

教科書は、4年生として転校してきた少年が彼の祖父にインタビューして祖父の略歴、彼の生活の糧の入手方法、名字の由来を尋ねた様子と、祖父の祖父が祖国解放戦争で功績を挙げて勲章をもらったことなどの説明、インタビューで用いたノートに記された記録、勲章のデザインの解説などを記載している。教科書に対応する生徒用作業帳での課題は、家族史のインタビューをする学習、生徒の家に残された遺産に

ついでに質問事項に回答する作業、本小単元で用いられた語彙についての文字パズルの解答である。指導書では、生徒たちの家族に祖国解放戦争、朝鮮戦争、キプロス出兵に参加した人がいたら教室に来て話してもらうことなどを示唆している。生徒用作業帳の取扱いについての特記は見られないが、実際にオーラル・ヒストリーの手法で家族史を書くパフォーマンス課題とその評価基準を示し、凱旋兵に生徒の感情や考えを説明する手紙を書かせる企画も示唆している。さらに、親戚の様子から家系図ができること、オーラル・ヒストリー実施上の留意点などの説明や、本文中の語彙であるトルコ兵財団（TSK）の補足説明をしている。

（小単元「私たちの文化」：単元目標 1, 2, 4、教科書 4 頁、2 校時展開）

教科書は、祝祭日や披露宴時の料理、衣服、民族舞踊の写真などを掲載して、民族文化が色濃く見られる披露宴や祝祭日の様子を詳細に確認し、アタテュルクもそれを重視していることに言及している。生徒用作業帳は、嫁入り時の長持について自分の家の場合を調べたり、「壊れたコーヒーカップ」という歌詞についての設問から文化における長持の地位に気付く学習、家族の古い写真について調べる学習からなる。指導書は、生徒たちに地方色の強い服装についての情報を集めさせて、それを他の生徒たちに紹介させたり、民族文化をどのように守るのか、民族舞踊、服装、食事など様々な要素に分けてグループで調べさせたり、民族文化を発展させるテーマで作文を書かせる課題を示している。さらに、披露宴などでの来賓への食事の歓待の仕方や出征の際の催事についての質問や、服装の特徴についての一般化はできない旨の留意点などにも言及している。

（小単元「私たちは祭典に行くところです」：単元目標 2, 3、教科書 2 頁、2 校時展開）

教科書は、各地で開催される祭典の例としてエディルネで行われるオイル・レスリングや、オイル・レスリングと同様中央アジア起源の馬に乗って棒を投げ合う競技（ジリト）の絵を記載している。生徒用作業帳では、家族の大人に子ども時代の遊びや玩具について尋ねたり、寸劇のシナリオを読んで設問に答える課題がある。指導書は、生徒の地元で開催される祭典のポスターや写真などを持ってこさせたり、それがどのような目的で開催されているのかを調べさせ、それをレポートとしてまとめさせる課題を示唆している。祭典の社会的な意義やジリトについての解説と、生徒に祭典などでどのような活動をしたのかといった発問例も示している。

（小単元「学生時代のアタテュルク」：教科書 2 頁、1 校時展開）

本小単元ではアタテュルク主義習得を目標にしており、単元目標は記されていない。教科書は、アタテュルクの生い立ちから軍事専門学校を卒業するまでの解説、彼が子どもの頃の思い出を記した文章や、彼の両親、学生時代の彼自身、生家の写真を掲載している。生徒用作業帳ではアタテュルクの生活を学園生活、家庭生活、軍隊生活に分けて整理する活動が行われる。指導書では、よい指導者であるための特性やアタテュルクが学んだ学校を順々に言わせることなどを示唆している。

（小単元「トゥラブルスガルブからチャナッカレへ」：教科書 2 頁、1 校時展開）

本小単元でもアタテュルク主義習得を目標にしており、単元目標は記されていない。教科書は、アタテュルクが軍人として頭角を現したトゥラブルスガルブ戦役からチャナッカレ戦役までの彼の活躍ぶりの解説や、当時の彼の写真や戦闘ぶりを描いた写真などを掲載している。生徒用作業帳では、祖国解放戦争の戦闘ぶりを描いた絵から英雄的な兵士に対する共感を記述させるとともに、戦線の兵士になったつもりで愛する人への手紙を書かせる学習で、国土防衛にあたった兵士の思いを追体験させており、本小単元では祖国防衛に健闘した兵士への理解も図っている。指導書ではチャナッカレ戦役の重要性の確認と、兵糧を通してのチャナッカレ戦役の激戦ぶりを理解させることを示唆している。

（小単元「ムスタファ・ケマルがサムスンに上陸しています」：単元目標 5、教科書 2 頁、2 校時展開）

教科書は、オスマン帝国が結んだモンドロス休戦協定によって進駐した連合国軍に対して抵抗した各地の様子と、抵抗勢力が組織化される必要性を記述している。生徒用作業帳では「私の周辺で祖国解放戦争

を調べています」とのタイトルで調べ学習をすることになっているし、指導書は、身近な所での祖国解放戦争の英雄やシンボルの情報を集めて説明させたり、祖国解放戦争についての物語や小説を解説したり、民謡・マーチを歌うことを推奨している。トルコ人のアイデンティティとなる国民闘争を単なる過去の物語にしないように、身近な存在に結びつける様々な学習の工夫を実践することを示唆している。

(小単元「セーブル条約に対して」：単元目標 5、6、教科書 2 頁、1 校時展開)

教科書は、サムスンに上陸したアタテュルクらが中心となって抵抗勢力の組織化を図り、トルコ大国民議会政府を樹立していった経緯と、オスマン帝国が締結したトルコ分割案であるセーブル条約の説明を記載している。生徒用作業帳では、アタテュルクが軍隊に宛てた電報の本文を読ませて、生徒が司令官だったら戦争で勝利した軍人にどのような祝電を打つのか記述させたり、アタテュルクのサムスン上陸から共和国宣言までの主な出来事の日付確認と写真添付の作業をさせる。指導書は、祖国解放戦争の映画を観させたり、エルズルム会議のような教科書本文の用語について、説明ないし生徒に調べさせることを示唆している。また、「敵の勢力がアンカラ・ポラトゥルまでやってきました。あなたもポラトゥルでの軍の司令官です。そのような状況でどうしましたか。」という問を発して、生徒の考えを説明させるシミュレーション学習も提示している。

(小単元「諸戦線」：単元目標 5、6、教科書 2 頁、1 校時展開)

教科書は、アタテュルクを総司令官に西部戦線、東部戦線、南部戦線で外国軍を攻撃し勝利した様子の説明、外国軍攻撃の端緒となったイズミルにおける「占領の最初の弾丸と最初の殉教者」の新聞記事のコピーを掲載し、占領下におかれたときの感情を問いただしている。生徒用作業帳では、国民闘争の中での出来事 9 項目とその年月日を組み合わせる作業をしてから、出来事を年代順にまとめる課題がある。指導書では、教科書本文で生徒が意味を理解していない言葉をわからせるように示唆している。

(小単元「私達の英雄達」及び「祖国解放戦争でのトルコの婦人」：単元目標 5、6、教科書 2 頁、1 校時展開)

教科書は「私達の英雄達」の片面 1 頁全体に、アタテュルクを中心に囲む形でイノニユなど祖国解放戦争を指揮した司令官 13 名の肖像画が示されている。他の 1 頁が「祖国解放戦争でのトルコの婦人」に充てられ、祖国解放戦争で活躍したカラ・ファトマ (Kara Fatma) や露土戦争で活躍したネネ・ハトゥン (Nene Hatun) など女性の英雄の紹介と、国民闘争を支える女性の写真が掲載されている。生徒用作業帳には、スポーツ、学術、その他の分野で活躍したトルコ人女性をそれぞれ 3 人調べて記述する課題がある。指導書は組織的な軍隊の重要性と祖国解放戦争での勝利におけるその役割を強調したり、国立墓地や博物館を訪れて司令官たちの遺品を調べさせることや、前線や銃後での女性の献身的な活躍を説明したり、女性の英雄の生涯や偉業に関する宿題を出すことを示唆している。

(小単元「共和国が創設されています」：単元目標 6、教科書 2 頁、2 校時展開)

教科書は、トルコ大国民議会がアンカラで開催されるに至った経緯や共和国宣言でのアタテュルクの役割についての説明とそれに関連する写真などを掲載している。生徒用作業帳では、共和国記念日に関する設問に解答することや、アタテュルクの考え方や彼自身の人柄から彼を尊敬した人物や団体が紹介され、生徒自身もアタテュルクに関する言説を見つけて文章を書く課題がある。指導書では、どのようにして共和国と巡り会ったのかをドラマチックに説明したり、共和国記念日を祝うための企画を教室で準備できることなどを示唆するとともに、共和制の概念を具体的に理解させるための工夫などを紹介している。

(本単元終了後の評価)

本単元だけでなく、他の単元でもそうであるが、教科書には単元の最後に、生徒自身による学習評価のための頁が見開きで設定されている。本単元では、1. 伝統、嫁入り道具、凱旋兵などについての説明文を単語と組み合わせる問題、2. オーラル・ヒストリーや民族舞踊などといった単語を文中の空欄に入れさせる問題、3. アタテュルクがその功績を認められ凱旋兵 (ガージー) の尊称と元帥の階級を与えられることになった戦役、東部戦線での対戦相手などを四択で問う問題、4. 地元での文化的特色を紹介し、

その文化的特色を保護・維持するために生徒自身どんなことをしなければならないのかを、1頁の文章にまとめるなどの課題が提示されている。これらの問題・課題の他に、本単元の要約と単元に関連する生徒用参考文献のリストも記載されている。また、生徒用作業帳では、生徒が学習の自己評価をするための一覧表が記載されており、3段階で評価することになっている。評価項目としては、オーラル・ヒストリーの手段で物や家族の歴史を作り上げられるか、トルコの文化史上広く踊られて現在でも続けられている舞踊の例を挙げられるかなど、小単元の内容に対応した11項目が設定されている。

3-3 5年生「第8単元：私たちみんなの世界」

(本単元の概要)

指導書の本単元導入頁に示されている概要によると、地球的なつながりを学習領域とする本単元で習得される目標は、1. 世界の子どもたちの共通する側面と関心領域に気付くこと、2. 国家間には交易があることに気付くこと、3. 国家間の経済関係への情報や交通の技術がもたらす影響を議論すること、4. 様々な国で見られる人類共有の遺産の例を挙げること、5. 共有の遺産を知らせるうえでの観光の役割に気付くこと、6. 観光の国際関係における役割をテーマに見方を発達させることであるが、アタテュルク主義に関連し、彼が平和愛好的な政治家であることを把握できることも指摘している。

(小単元「私たちの輸出入品」：単元目標2、教科書2頁、1校時展開)

教科書は、トルコの地図、地図内に主な輸出品の写真、地図外に輸入品の写真を、それぞれ掲載しているし、新聞記事も添付され、記録的な輸出の増加と原油の輸入先を紹介している。生徒用作業帳では、描かれている物品を輸入と輸出に分けたり、輸出品それぞれについてトルコでの産地、輸出相手国、輸送手段を調べさせたり、輸入品それぞれについて輸入相手国、輸入相手国へのトルコからの輸出品、輸送手段を調べさせる。指導書では、教科書に載っている図の説明と輸出入品の写真の確認をしている。

(小単元「私たちはドイツにいます」：単元目標1～6、教科書4頁、2校時展開)

教科書は、童話「ブレーメンの音楽隊」の一部、ドイツの国旗と地図などで最初の頁を構成し、グリム童話が世界中の子どもに知られていることを確認している。見開きの片側頁では、ドイツの経済力、トルコ人を含めた外国人労働者の存在、両国の友好と貿易の増加でドイツがトルコの最大貿易相手国であることを説明するとともに、ドイツが世界的な造船国であることを説明する豪華客船と風力発電の写真などを掲載している。後の見開きでは、ベルリンの博物館島や古城の写真、共有遺産保護の重要性についての記述、民族衣装をまとった少女の写真を掲載し、盛大な祭典の開催などの文化継承活動が組織立てられている旨の説明がある。ゲーテンベルクが印刷機を発明したときの挿絵やトルコで最初に印刷機を利用した人物の肖像も掲載して、印刷機の発明が我々の生活にもたらした恩恵について概述している。生徒用作業帳には4つの課題があるが、主なものとしては、ブレーメンの音楽隊、ユネスコ世界遺産登録、ヨーロッパ連合などのキーワードをすべて使って文章を書く学習、トルコやドイツに関連する単語のパズルを完成させる学習などである。指導書は、ブレーメンの音楽隊の銅像がつけられた目的を質問したり、自動車など工業製品のメーカー名からドイツが最先端の工業国であることを確認させることなどを示唆している。古城の写真から古城の立地や建設目的を考えさせ、同様な建物がトルコにも見られるのか質問してみたり、情報を収集する手段としてテレビやコンピュータの活用と読書でバランスを図る必要があることに、気付かせることも紹介している。

(小単元「ナイルの国」：単元目標4～6、教科書4頁、2校時展開)

教科書は、エジプトの国旗と地図、スエズ運河開通の模様を示す写真とともに、同運河開通の華々しい祝賀会の様子を記述し、当時まだ影響力があったオスマン帝国についても言及している。ナイル川の写真を掲載してエジプトの地理的特徴を紹介し、エジプトが世界的な観光国であることも説明している。さらに、世界七不思議の一つとされるアレクサンドリアの大灯台の挿絵も掲載している。後の見開きでは、イ

スタンブールにあるオペリスクの写真と説明とともに、そこに刻まれているヒエログリフ一般についての説明をしている。ピラミッドやツタンカーメンの写真と壁画を掲載し、ピラミッドの構造とその建設目的も説明している。ピラミッドの写真には、起重機のない時代にどのようにして建設したのか問いかけるキャプションが添えられているが、興味・関心を持たせる工夫が見られる。また、壁画から当時の出来事がわかるが、生徒たちが絵で生活の出来事を表現するとしたら何をどのように表現するのかを問うキャプションは、当時の人々へ共感を持たせる工夫と考えられる。生徒用作業帳には6つの課題があるが、主なものとしては、世界七不思議を調べてその所在地と作成年代を書くとともに、最も気に入ったものの絵を描いたり、世界やトルコの見所、さらに身近な地域にある見所から、生徒なりの世界七不思議を一覧表にまとめる学習、地図帳を用いて、ドイツなど本単元で扱う国がトルコのどの方位にあるかを調べるとともに、トルコを中心にして近隣諸国を八方位で答える学習、アルファベットに対応したヒエログリフの表を用いて、ヒエログリフで自分の名前などを書く学習などである。指導書は、エジプトの位置を確認させたり、運河と海峡の違いやパナマ運河、ヴォルガ・ドン運河などについて言及すること、文明が大河川沿いで形成されたことに気付かせることなどを示唆するほか、エジプトの世界遺産や古代エジプト絵画の特徴などについて解説している。スエズ運河などの開通式に関する創作劇活動と、運河、ピラミッドなどの単語をジェスチャーで表現する学習活動も示唆している。

(小単元「日本での船」：単元目標1, 2, 4, 6、教科書4頁、2校時展開)

教科書は、日本の国旗と地図、エルトゥールル号の絵、富士山のそばを走る新幹線の写真を掲載し、1890年に発生したエルトゥールル号遭難の際に日本人が救助や犠牲者救済の義捐金募集をしたうえに慰霊碑や記念館を建設し、そうした友好関係が両国の文化経済交流を進展させたことを解説している。見開きの片側頁には、和服を着た子ども、かまくらを楽しむ人々などの写真を掲載し、日本では伝統的な価値を存続させるために多くのお祭りが催され、その際に和服が着用されること、四季の明瞭な日本では様々な植物が生息するが、とりわけ桜はシンボリックな存在であること、日本は野菜や果物の需要の半分は海外に依存しており、トルコからはトマトジュースの原料、タバコ、乾燥果物を輸入していることなどを説明している。後の見開きでは片側に、自動車工場や那智の滝などの写真を載せ、日本は世界的な水産国であるが、40%を輸入に依存しており、トルコからも水産物を輸入していること、日本は石油などエネルギーを海外に依存し、産油国からタンカーでより安全に安く輸送されることを説明している。さらに、国土の70%が森林で、木造の宮殿や寺社を見るために世界から観光客が来訪している旨の囲み記事もある。反対側の頁には、屋根にソーラーパネルを設置した住宅地の写真、明治天皇らしき人物とアタテュルクの並んだ肖像画、主要アニメ生産国日本を象徴するアニメ・キャラクターを掲載して、日本は自動車と電気機器・電子工業で世界経済をリードしてきたし、トルコに直接投資している企業もあること、日本は省エネルギーで様々な手段を追求しており、雪を用いて農産物を保存しエネルギーを節約している事例を紹介している。生徒用作業帳の第1の課題は実際に鶴を折ってみるものであり、第2の課題は日本に関する知識を活用して、自分なりの詩を完成させるものである。第3は、エルトゥールル号、富士山など7つの単語をすべて用いて、文章を書く課題である。指導書は、近年トルコで発生した地震、住んでいる地域での季節によって催される祭典について発問することと、日本のクリーン・エネルギーを紹介するとともに、子どもの生活する身近な地域で使用されているエネルギーの種類を説明させることなどを示唆している。エルトゥールル号の遭難に関する創作劇と、トルコの水産業が発展しなかった理由について討論する学習活動なども紹介している。

(小単元「コーヒーのひととき」：単元目標1～6、教科書4頁、2校時展開)

教科書は、ブラジルの国旗と地図、コーヒーの木と豆の写真を掲載し、トルコ・コーヒーと呼ばれるようになった所以や、ブラジルがトルコではよく知られた親しみのある国であることを記述している。さらに、オウム、アマゾンの植生、原住民などの写真を掲載し、アマゾン盆地には固有の生物が生息している

ことや、イグアス滝がブラジル側から多くの観光客を呼び込んでいることを説明している。なお、アマゾンの植生の写真に付けられたキャプションは、地球環境問題に着目するような視点を考慮している。後の見開きにはペレ、カーニバルなどの写真を掲載し、ブラジルは有名なサッカー選手を輩出しており、男子の夢はサッカー選手になることや、リオのカーニバルには世界中から観光客が集まることを説明している。アマゾン劇場とリオデジャネイロの風景の写真が掲載され、ブラジルのカーニバルのように、各国には他国の人に認知される特徴があることも記述している。生徒用作業帳での課題は、コーヒー、熱帯雨林、サンバなど6つの単語をすべて用いて文章を書く学習と、本単元で扱われる5か国に電話することを想定し、国際電話の国別番号や5か国のナンバープレートのコード（トルコであればTR）を調べるなどの学習である。指導書は、コーヒーに関する諺や慣用句について発問したり、ブラジルの熱帯雨林保護のために全世界が注目するようになったことについて話し合わせることで、トルコにおける森林の保護について確認することなどを示唆している。また、外国に住むトルコ人の渡航理由やトルコの森林面積拡張対策をテーマにブレインストーミングをさせたり、サッカーやサンバなどの単語をジェスチャーで表現させる活動も提案している。

（小単元「“白い金”の国」：単元目標1～6、教科書4頁、3校時展開）

教科書は、ウズベキスタンの国旗と地図、イブン・シーナー¹⁾が王侯の診察をして図書館の利用が認められた逸話の4コマ漫画、アンカラにあるイブン・シーナー病院の前にある彼の銅像とブハラ市街の写真それぞれを掲載し、彼がウズベキスタン領内のブハラで生活したことがあることや、ブハラには古くからシルクロードが通じて現在でもその重要性が継続していることを概説している。さらに、綿花畑の子ども、精油所、カラクル羊、結婚披露宴に向かう様子などの写真をそれぞれ掲載し、ウズベキスタンの主要農産物が質の良い綿花であり、それは“白い金”と呼ばれ、喜び、威信、富の象徴となっていること、ウズベキスタンは天然資源にも恵まれていること、同国で飼育されるカラクル羊は上質な羊毛や毛皮を産することを説明している。また、2005年5月から6月にかけてイスタンブールで開かれたトルコ民族世界の子ども祭典に45グループが参加した模様が、囲み記事となっている。生徒用作業帳には4つの課題があるが、本単元全体に関係する学習活動としてカッパドキアなど7例の自然遺産について調べたことをまとめる学習と、ウズベキスタンについて学んだことを文章にまとめる学習などである。指導書では、ブハラ市街の写真から建物についての特徴やトルコの都市との共通性や差異を探させることと、ウズベキスタンの3分の2が砂漠であるにもかかわらず農業用地がトルコより多いのは何故か、理由を問うことを示唆している。また、ロシア支配以降のウズベキスタン略史などの解説もあるが、シルクロードについては6年の学習なので詳細な立ち入りは不要としている²⁾。

（本単元終了後の評価）

本単元の最後にも、生徒自身による学習評価のための頁が見開きで設定されている。本単元では、1. カーニバル、運河、折り紙など、それぞれの説明文を単語と組み合わせる問題、2. ナイル川、カラクル羊などの単語を文中の空欄に入れる問題、3. 単元全体にわたる学習内容について3題の四択問題、4. 日本ではタンカーが不可欠だが、もし無くなったらどのような危険性が発生するのか、について記述させる問題である。本単元でも、これらの問題のほかに本単元の要約と単元に関連する生徒用参考文献のリストも記載されている。生徒用作業帳でも、生徒が学習の自己評価をするための一覧表が記載されており、3段階で評価することになっている。本単元の評価項目としては、世界の子どもたちの共通の側面を例示できるか、国家間の取引に気付いたかなど、小単元の内容に対応した8項目が設定されている。本単元では作業帳に、様々な国の世界遺産を例示するパフォーマンス課題もある。それらについて調べ、写真などを付してレポートを作成する課題で、そのための追究過程も示されている。評価は3段階である。

3-4 6年生「第3単元：私たちの国の資源」

(本単元の概要)

指導書の本単元導入頁に示される本単元の概要によると、生産、分配、消費を学習領域とする本単元で習得される目標は、1. トルコの資源と経済活動を関連付けて、資源の国民経済での位置付けや重要性を評価する。2. トルコの地理的特色に注目して、投資やマーケティング計画の提案をする。3. 公民の責任と国民経済への貢献の視点から、納税の義務と重要性を擁護する。4. 経済発展への貢献となる機構や組織を認識する。5. 天然資源の無自覚な消費が人間の生活に与える影響を議論する。6. 質の高い労働力がトルコ経済の発展で果たす役割を評価する。7. 関心を持った職業に必要な教育、能力、個性を追究することである。

(小単元「どこから、どこへ」：単元目標1、教科書2頁、2校時展開)

本小単元の目標は、生徒がトルコの天然資源とその豊かさに気付き、それと経済活動との関係や経済活動の国民経済への貢献を確実に評価できるようになることであり、教科書は、地理的要因、天然資源、技術の発達、需要や欲求、国家の支援の5つの要因を説明するが、地形の人間生活に与える影響といった具体的な視点も例示している。生徒用作業帳にある課題は、産業別所得の絶対値から産業全体でのそれぞれの産業の比率を計算したり、教科書に記載されている産業従事者比率の年次変化のグラフを具体的に読み取って変化の理由を説明する学習と、第二次産業と第三次産業に分類される部門を具体的に挙げる学習である。指導書は、生徒の家族の収入源やその経済活動部門、生徒の住む場所の経済活動とその活動に影響を与える要因についての発問、経済活動に影響する地理的要因の詳説、需要と産業部門との関係を追究できるような発問などを示唆している。

(小単元「私達の資源が利益が変わっています」：単元目標1と4、教科書2頁、2校時展開)

本小単元の目標は、生徒がトルコの天然資源とその豊かさに気付き、それと経済活動との関係や経済活動の国民経済への貢献を評価できるようになることや、経済発展への貢献や援助を確実にものにする機構や組織を認識することである。教科書は、主要農産物である豆類、トウモロコシ、甜菜の栽培条件や生産の実態を紹介するとともに、農務総局(TiGM)や農業銀行などの農業を支える機構や組織を確認している。囲み記事では、トルコが様々な自然環境に恵まれているだけに多様な蜂蜜生産がなされ、その生産も多いことを記している。生徒用作業帳にある課題は、生徒が大手持ち株会社の最高経営責任者になったとして、食品部門を運営する缶詰工場を開設する場合、どのような要因に着目しなければならないのか、例示されている原料を参考に表にまとめて、工場をどの県に設置するのか、理由を挙げて答えるという学習と、村人がナツメヤシの苗木を後世の人への贈り物として植えた逸話をもとに、農業の重要性を考えさせる設問に答える学習である。指導書は、地元で育成される農産物を教室に持ち込み、その生育過程や、教科書に記載される豆類が農業支援の機構や組織を通じてなされる加工過程などについての発問、地元で経済活動を支援している機構や組織の機能について具体的な事例を問うことを示唆している。

(小単元「地下から地表の豊かさへ」：単元目標1、教科書4頁、3校時展開)

本小単元の目標は、生徒がトルコの地下資源と鉱産資源の豊かさに気付き、それと経済活動との関係やその経済活動の国民経済への貢献を確実に評価できるようになることである。教科書は、オルハンという生徒が作成したトルコ全土の主要鉱産資源と工業部門の分布図を示して、トルコは世界的に鉱産資源が豊かな割には鉱業が未発達であることを記述している。鉄・銅・クロムの産地と精錬地の一覧表も掲載し、産地と精錬地との関係を考察させている。インターネットによるとトルコがホウ素の世界的な産出国であり、ホウ素が様々な工業部門で用いられていることを示す文書資料や表を、ホウ素で稼働する世界初の衛星をトルコが製作しているという囲み記事とともに掲載している。さらに、共和国時代になって工業化を達成し、現在では工業製品が輸出で重要な地位を占めるようになったという解説をしたり、工業会議所や商業会議所の役割についての説明資料をもとに、地元におけるそれらの活動について確認することや、分

布図を用いて工業地域とその立地について考察することを促している。オルハンが作成した工業の部門別所得の内訳、自動車生産の年次変化、工業部門別従事者数を示すグラフも掲載している。生徒用作業帳にある課題は、ホウ素、クロムなど15項目の鉱産資源の国内産地とその用途について調べる学習と、地元にある商業会議所や工業会議所について調査する学習である。指導書は、分布図を読み取らせるための質問を例示したり、レポートに関心を向かせる方策について生徒に考えさせることなどを示唆している。さらに、工場見学をしたらその様子を書かせることと、工場の建設に必要な資本、原料、質の高い労働力などについての発問や、工業に関するグラフを読み取るための発問例を示唆したり、工業の部門別所得の内訳のグラフと工業部門別従事者数のグラフとを比較して、その結果を解説することも紹介している。

(小単元「エネルギー資源は私たちには預かりものです」：単元目標2と5、教科書2頁、1校時展開)

本小単元の目標は、地元の天然資源を学び、それらの日常生活での積極的な活用についてのプロジェクト提案を考えられるようになったり、それを考える過程で天然資源を正しく活用する重要性和、無自覚に天然資源を消費することで人間生活に与える影響を議論できるようになることである。教科書は、エネルギーには再生不可能なものと再生可能なものに分類され、それらは日常生活に欠かせないものであることに言及して、デニズリ県にある地熱発電について囲み記事で詳説している。太陽光発電の日常生活における利用についても、世界から8事例を紹介している。生徒用作業帳の課題は、「エネルギー節約週間」でどのように節電をするのか、詩、絵画、漫画のいずれかで表現してみる学習と、後出の小単元「活力を与える計画」で紹介されている子どもが描いた絵について考えたことを記す学習である。指導書は、授業の導入として地元で用いる暖房のエネルギー資源の確保について発問することを示唆し、人類のエネルギー利用についての略史と再生可能なエネルギーの特性について解説するとともに、地熱発電については理科の教師などと協力して展開できることを確認している。太陽エネルギー利用の発問についての解答例や太陽エネルギー利用の特性についての解説もある。

(小単元「アイランを飲みましょう」：単元目標2、教科書2頁、1校時展開)

本小単元の目標は、トルコの地理的特色からどのような投資がなされるのかや、それが経済で果たす貢献を把握することであり、教科書は、「アイランを飲みましょう」という生徒が企画したプロジェクトの内容紹介である。アイランはトルコの伝統的な飲料で、ヨーグルトと水から製造される乳製品の一種であるが、これを世界中の学校で最も多く消費される飲料とするように企画しようというもので、放牧地・牧草地が広がり牧畜が盛んなトルコの地域性を生かした産業を発展させるとともに、トルコの名を世界に轟かせることを考えている。アイランの効用とコーラの害を論じた記事、トルコにおける搾乳家畜の頭数と乳生産量の統計データ、英語辞書にあるアイランとヨーグルトの項目などを、資料として掲載している。生徒用作業帳には作業課題がないが、地元の天然資源に着目させ、投資やマーケティングを提案させることを指導書が示唆している。指導書は、教科書の記載内容や統計データに関連する発問例なども紹介している。

(小単元「活力を与える計画」：単元目標1と2、教科書2頁、1校時展開)

本小単元の目標は、共和国時代になってからの最大のプロジェクトとして規定されるGAP(南東アナトリア開発計画)³⁾に生徒も気付かされ、その目的や対象地域、国家への貢献について情報が与えられるとともに、地元に応用される投資とマーケティングのプロジェクトの提案を企画することである。教科書は、1960年に子どもがティグリス・ユーフラテス川の灌漑で生活が向上することを空想のように語った作文、GAPの成果を絵にした子どもの作品、GAPの具体的な事業と成果を示した一連の写真を掲載して、空想とされた灌漑化が世界最大級の開発計画であるGAPによって実現し、農業生産の向上を核に地域経済の活性化が図られていることを説明している。生徒用作業帳には、国民の義務である納税、兵役、投票、遵法に関する子どもの経験談の文章をもとに、責任ある良き公民としてなすべき行為について記述させる課題があるが、次の小単元への導入的な意味を持たせている。指導書は、子どもの作文をもとにティグリ

ス・ユーフラテス川の位置や変化、農産物による収入などについての発問を例示したり、GAPの一連の写真から電力生産、就業の可能性、社会的文化的な発展、生産物の多様性、観光などでのGAPの貢献について発問することを示唆している。

(小単元「私の税金は私に戻っています」：単元目標3、教科書2頁、1校時展開)

本小単元の目標は、納税は公民としての責務であり、国民経済に重要な貢献をしていることを生徒に意識させることであり、教科書は、所得税、不動産税、法人税などの他に、日本の消費税に相当する税金が課されることを請求書や領収書から確認させるべく、それらのコピーを掲載している。さらに、1982年の憲法第73条で納税の義務を確認させるとともに、1999年に納税者番号制が導入されて国民の収入や支出が記録されるようになったことなどを解説し、納税者番号制のカードのコピーなども掲載している。生徒用作業帳にある課題は、納税が公民としての義務であり、国家の発展に貢献することを説明し、納税を促すようなスローガンを書く学習と、請求書と給与明細書のコピーから税金の部分を確認するとともに、家族の納税者番号を調べる学習であり、極めて実践的な課題となっている。指導書は、「学校、病院、道路などへの投資は、誰が、何から、どのようにしているのか」という発問で授業への導入とすることを示唆するとともに、税の一般的な説明と税金申告書、税務署、税の返還などの用語を解説している。さらに、憲法第73条を読ませる発問例も示している。

(小単元「森林の財産」：単元目標5、教科書2頁、1校時展開)

本小単元の目標は、天然資源の過度な消費や汚染に対して敏感で意識的な個人を育てることであり、教科書は、トルコでは密伐採やヤギの放牧が森林減少の主な原因であることや、山火事が地中海地方やエーゲ海地方で頻発していること、森林減少の結果、土壌浸食の問題が発生して結局移住しなければならないこと、森林が水源涵養で重要な役割を果たしていることなどを説明している。資料として、裸地化した山地の景観写真、森林の効用に関する一覧表、貯水池に流出した土砂の写真などを掲載している。生徒用作業帳にある課題は、騒音や海洋汚染など6つの環境汚染の写真から、それぞれの原因、結果、それを解決するための提案を記す学習と、天然資源のうち1つを選択し、その資源を無意識に消費することが人間の生活に及ぼす影響について解説するような作文を書く学習である。指導書は、天然資源が汚染された場合の人間生活への影響、自然のバランス、自然のバランスを壊さない程度の人類の需要などについて、補足的な情報を紹介している。

(小単元「お茶の話」：単元目標6、教科書2頁、3校時展開)

本小単元の目標は、初代農務局長となるズィーニ・デリン (Zihni Derin) の例から、トルコの経済発展において質の高い労働力の役割が評価されることであり、教科書は、ズィーニ・デリンが第一次世界大戦後の東黒海地方の経済を立て直すべく、茶の栽培と普及に努力した経緯と彼の功績をたたえる説明、リゼで初めて栽培された頃の茶畑や最近の茶摘みと収穫作業の写真、茶の主要生産国を示すグラフ、教育の重要性を語ったアタテュルクの言葉などを記載している。生徒用作業帳にある課題は、“できる、やれる”といった積極性を育て責任感を発達させることを目的に逸話を読ませる学習と、本文からズィーニ・デリンの思いや考えを読み取る設問と、職業が成功するための視点や職業選択の観点についての設問に答える学習である。指導書は、様々な分野での修学を証明する修了書や様々な職業に関する写真などの教材から職業の特性について考察させること、茶の栽培とその普及の条件や理由を確認させるとともに、現在では移住を防ぐ手段として観光開発が進展していることを強調すること、ズィーニ・デリンが示した仕事への愛着と意欲が成功の鍵であることなどを明言することを示唆している。

(小単元「足跡を残した人たち」：単元目標6、教科書2頁、3校時展開)

本小単元の目標は、トルコの経済発展における質の高い労働力の役割を評価することであり、教科書は、トルコの近代的な演劇や映画の制作に貢献したムースィン・エルトゥールル (Muhsin Ertuğrul)、トルコ民族音楽の創設に貢献したアーメット・アドゥナン・サイグン (Ahmet Adnan Saygun)、トルコにおける

近代的精神医学の創設者の一人アイハン・ソンガル (Ayhan Songar)、社会心理学の創設者チーデム・キヤウトゥチュバシユ (Çiğdem Kağıtçıbaşı) 4人のプロフィールや顔写真を掲載している。関心、意欲と才能の方面でよい教育を受けた人を“質の高い人”とした図式や、ある子どもが両親に宛てたはがきも紹介している。生徒用作業帳には、子どものはがきを参考に、両親の職業、職業に関連する事故や病気とその対策などを調べ、職業病や職業に伴う事故を防ぐことの重要性を考える課題がある。指導書は、様々な分野で成功した人の伝記や仕事の例を論拠を持って紹介させること、教科書の4人が質の高い人である理由を答えさせること、仕事で最優先される条件は仕事の安全であることに授業の時間を費やすことなどを示唆している。

(小単元「私たちが職業を選択する際」：単元目標7、教科書2頁、2校時展開)

本小単元の目標は、生徒が関心を持つ職業を多面的に追究することであるとし、教科書は、ある美術教師が何故その職業を選択したのかを説明して、「皆さん、私たちが職業に好きで就くことが何故大切なのでしょうか」と問いかけている。美術教師になるまでの過程や、どのような環境や条件で働くのが幸せなのか、自分自身を知ることを自問した旨の記述もしている。さらに、職業選択にあたっては個性、能力、関心、家族の状況、価値、目標に合致したものでなければならないことなどを説明している。生徒用作業帳には、社員募集の広告記事のコピーが資料として掲載され、人間、データ、物、思考という4つのカテゴリーに分けられた28の行動や作業について各自が好きか嫌いかを判断して、どのカテゴリーに好きなものが多かったのかを確認させる調査票がある。調査票の最後にはそれぞれのカテゴリーに相応する職業例が示されているが、他の例も探すことになっている。指導書は、生徒にどんな職業に就きたいのか発問し、そのためにはどのような教育を受けなければならないのか議論させた後、各自の関心、能力、身体的特性を配慮して職業の選択をすることが重要であること、職業に貴賤がないことを強調することなどを示唆している。さらに、キャリア教育関連の他教科共通作業課題を4例掲載している。

(本単元終了後の評価)

教科書の本単元の最後にある学習評価では、第1問は単元全体にわたる学習内容についての正誤問題8題で、知識・理解を問うものである。第2問も単元全体にわたる学習内容についての出題で、単純に知識・理解を計るものである。第3問は四択問題であるが、工業地域の特徴、エネルギーについてのグラフの読み取り、森林破壊の帰結などについての出題で、知識・理解だけでなく思考力・判断力も評価している。第4問は、再生可能なエネルギーの特徴、病院を開業するのに必要な要員、トルコでの先駆的な生産物や家畜を問う出題で、思考力・判断力や関心・意欲も評価する内容となっている。本単元でも、これらの問題の他に本単元の要約と単元に関連する生徒用参考文献のリストも記載されている。また、生徒用作業帳でも生徒が学習の自己評価をするための一覧表を記載しており、3段階で評価することになっている。本単元の評価項目としては、資源と経済活動との関連付け、トルコの地理的特色に着目した投資とマーケティング計画の提案など、単元の目標に対応した8項目が設定されている。本単元の作業帳に、関心のある職業を決め、実際に身近なところでその職業に従事している人に面会して、その職業に必要な教育、能力、個性などについて聞き取ったものを報告書にまとめる、パフォーマンス課題も設定されている。その自己評価も3段階である。

3-5 7年生「第3単元：トルコ史の旅」

(本単元の概要)

指導書の本単元導入頁に示される本単元の概要によると、文化と遺産を学習領域とする本単元で習得される目標は、1. ルーム・セルジューク時代におけるトルコ人の政争と文化活動のアナトリアでのトルコ化過程への貢献を評価する。2. 論拠に基づき、オスマン帝国の政治力具現化に影響を及ぼした諸要因を説明する。3. オスマン帝国の征服や戦闘を、商業や海の重要さから評価する。4. オスマン社会におけ

る寛容と共生の考え方の重要性に関連する論拠を示す。5. 都市研究の方法で、トルコの文化、芸術、美的な理解における変化と継続に関する論拠を示す。6. オスマン朝とヨーロッパの関係の枠で、文化、芸術、美的な理解における相互作用に気付く。7. 旅行記を手がかりに、トルコ文化に属する構成要素を例示する。8. オスマン帝国における改革活動の結果を、出現する組織から社会的経済的変化について推論することである。

(小単元「祖国、アナトリア」：単元目標1、教科書6頁、3校時展開)

本小単元の目標は、アナトリアに生存した文明の1つがルーム・セルジューク帝国であり、その時代にアナトリアへトルコ人が密に移動したことに気付かせ、その時代に続いた様々な政争、商業、文化活動がアナトリアにおけるトルコ人の永続的な状況に確実に貢献したことを理解させることである。教科書は最初の見開きで、ビザンツ軍をセルジューク軍が破ったマラズギルトの戦い以後アナトリアへのトルコ人の移動が活発になり、アナトリアにはトルコ系諸君侯領（ベイリック）が成立したことを概説し、ルーム・セルジューク帝国、ダニシマンド朝などのベイリックの領域を地図で図示している。それらの史跡として世界遺産に登録されているメンギュジェク朝のディブリーイ大モスクなどの写真も掲載し、当時のアナトリアの生活を記したマルコ・ポーロの見聞記の一端を紹介している。次の見開きはルーム・セルジューク帝国をテーマに、ルーム・セルジューク帝国が繁栄の基盤とした中継貿易や経済生活の様子を記した文書資料、交易の重要な役割を果たしたキャラバンサライを説明した囲み記事、ルーム・セルジューク帝国の最盛期を治めたアラアッディン・ケイクバトが開いた宴会での料理についての説明、当時のパン屋を描いた細密画、ルーム・セルジューク帝国の衰退の契機となるモンゴルの襲来を描いた絵画などを掲載している。最後の見開きは十字軍の遠征がテーマで、ローマ法王ウルバヌス2世が呼びかけた吹き出しとその様子を描いた絵画、十字軍遠征の根底には西欧の経済的な貧困と抑圧があったことや、十字軍が頼りにしていたビザンツ帝国がミリオケファロンの戦いでルーム・セルジューク帝国に負けたことがアナトリアのトルコ化を強化する結果となったことの説明、第1次から第4次までの十字軍遠征に関する年表、第1次及び第2次十字軍遠征ルート of 地図、十字軍の遠征の結果イスラム教徒の異教徒理解が進んだことを示唆する文書資料などを掲載している。生徒用作業帳にある課題は、教科書を用いて港湾都市の特性、キャラバンサライの実態と機能などについての設問に記述で答える学習と、十字軍に参戦し東方で様々な文物に触れたルイの説話を読んで、彼が帰国した時に予想される行為や感情などについての設問に答える学習である。指導書は、授業の導入に必要なベイリックとルーム・セルジューク帝国の史跡リストの作成を示唆し、6年生の単元「シルクロードのトルコ民族」で学んだ中央アジアからアナトリアへのトルコ系民族の移動について確認することにも言及している。教科書に記載される諸資料の活用例に言及するとともに、各ベイリック、ルーム・セルジューク帝国の略史と教育、文化、文学、交易、十字軍遠征の発生理由、各次の状況、もたらした宗教的・政治的・社会的・経済的帰結について解説し、教師が教科書の学習内容を補足的に説明できるようにしている。

(小単元「オスマン帝国の創設」：単元目標2、教科書6頁、5校時展開)

本小単元の目標は、オスマン帝国がどのような条件でどのようにして出現したのかを把握させることであるとし、教科書は最初の見開きで、オスマン帝国がビザンツ帝国との戦いに勝利して周辺のベイリックの評価を獲得できたことが領土拡張につながったことの説明と、オスマン帝国の創始者であるオスマン・ベいの個性や指導性が帝国の発展をもたらしたことを示す逸話を掲載している。次の見開きはイズニックとバルカン半島への進出がテーマで、ルーム・セルジューク帝国の首都にもなったイズニックをオスマン帝国が版図に組み込んだことが他のベイリックに敬意を抱かせることになった説明、イズニックの市街図、イズニック・タイル展示会のポスターを掲載している。さらに、バルカン半島への進出策略の解説と囲み記事によるオスマン帝国のバルカン定住策を掲載し、トルコ料理文化のバルカン半島への影響やブルガリアに現存するオスマン時代の建造物に関するデータも紹介している。最後の見開きはオスマン帝国の軍隊

と行政がテーマで、帝国拡大の基礎をなす軍団の組織図、イエニチェリ⁴⁾創設の経緯に関する逸話の囲み記事と儀式の衣装をまとったイエニチェリの絵、当初御前会議がスルタンの代理を果たしたが、メフメット二世以降は宰相が采配をふるうようになったことの説明、御前会議に出席する五役の役割についての解説と会議の様態を表した絵を掲載している。生徒用作業帳での課題は、オスマン・ベイの征服に対する考え方や治世の方針などを示した逸話の文書資料から、彼の考え方に対する生徒自身の考え方を述べたり論拠を見出したりする学習と、オスマン・ベイからムラト二世までの間の征服地拡大の過程を、教科書に記される主な征服地の年表と白地図への地名の記入から確認する学習、オスマン帝国樹立に関する映画を観て、その内容の確認や登場人物の描き方、観ての感想などの設問に答える学習である。指導書では、教科書に掲載される諸資料の活用例を示すとともに、イエニチェリ軍団の創設、1413年のオスマン帝国再建から1451年のメフメット二世の即位までの隆盛期などについて詳説し、教科書内容を補足説明できるようにしている。

(小単元「オスマン帝国の新たな首都で」：単元目標3、教科書8頁、6校時展開)

本小単元の目標は、オスマン軍が陸上や海洋で勝利し、地中海をトルコの湖状態にしたことや、一時期貿易での主導権を握ったことを把握させることであるとし、教科書は最初の見開きで、イスタンブールを中心にした世界地図、メフメット二世によるコンスタンティノープル攻略の経緯の説明、オスマン艦艇の山越えを描いた絵、黒海と両海峡を支配したメフメット二世による新首都再建への取り組みについての説明、トプカプ宮殿とグランド・バザールに関する解説と写真を掲載している。次の見開きは、オスマン帝国の創設から1699年までの版図拡大を示す歴史地図だけからなるが、拡大の一時期を選び、その時期になされた陸上・洋上の会戦と講和について調べ、それぞれが政治・経済・社会的にどのような影響を及ぼしたのかを追究するように、生徒に指示している。その次の見開きは海洋の征服がテーマで、オスマン帝国による海洋支配のための海事活動の概説、オルハン・ベイからスレイマン一世までの時代の進展状況を示す年表、オスマン時代の造船事情についての説明、16世紀のオスマン帝国海軍の提督になったバルバロス・ハイレッディン・パシャがスレイマン一世に招聘されたときの両者の会話と会見の様子を描いた細密画、プレヴェザの戦いでバルバロスの活躍を記した囲み記事を掲載している。最後の見開きは、地中海での支配権確立のためにヴェネツィアが支配していたキプロス島を征服することになった経緯の概説、クレタ島征服の説明、レパントウ海戦を描いた絵などを掲載するとともに、キュチュック・カイナルジャ条約での黒海北岸のロシア割譲やクリミア戦争でのスィノップにおけるオスマン海軍の大敗など、領土縮小への過程も説明している。生徒用作業帳には、メフメット二世のイスタンブール入城の絵をもとに、描かれた内容とコンスタンティノープル陥落前後の諸側面などについての設問、オスマン帝国が強力な国家として出現した要因を地理的位置、定住、軍の構成、経済的社会的構造から考察する課題などがあり、事象の原因や過程を問い、思考力を育成する学習となっている。指導書は教科書に掲載されている諸資料の活用例を紹介するとともに、版図拡大過程、コンスタンティノープル陥落の国内外への影響、レパントウ海戦、スィノップ奇襲などの項目について詳解している。

(小単元「異なる文化が併存しました」：単元目標4、教科書2頁、2校時展開)

本小単元の目標は、文書や証拠を媒介にしてオスマン帝国での寛容さを教えることであり、教科書は、オスマン帝国が宗教的にも多様で多民族社会であり、寛容な国家であったとされる論拠として、メフメット二世がボスニアの宗教家に発した約束の文書と絵画、オスマン帝国の政策を垣間見た外国人旅行者の旅行記、モスクと教会の併存を示す写真などを掲載している。非イスラム教徒が商売で活躍し専門的な仕事を持つ状況が続く社会で、彼らにどのような振る舞いを示すことになるのか問いかけ、多文化共生を現代的課題としても捉えさせようとしている。生徒用作業帳の課題は、生徒の寛容度を問う7つの項目に回答することで自分自身の理解を図ることと、今日における寛容についての理解とオスマン時代における寛容についての理解の変化と継続について、自分の考えを書くことである。指導書は、教科書に掲載されてい

る諸資料の活用例を示す他に、オスマン帝国が寛容な国家となった理由としての非イスラム教徒融和政策について、具体例を紹介している。

(小単元「私たちの道はスイヴァスに通じました」：単元目標5、教科書4頁、2校時展開)

本小単元の目標は、都市研究の方法でトルコ文化における芸術と美的な理解の歴史を見出すことであり、教科書は最初の見開きで、差異と共通性を探するための現代とセルジュク時代のスイヴァスの都市図2枚、スイヴァスがセルジュク時代に繁栄した都市であることの解説、オスマン時代の都市の形成と発展や17世紀のスイヴァスの様子を描いた旅行記の囲み記事を掲載して、都市成立の要素として社会的な諸施設の存在を確認している。祖国解放戦争で重要な役割を果たしたスイヴァス会議の写真が、県のホームページに掲載されていることにも言及している。次の見開きは、スイヴァスを代表する建物としてセルジュク時代のギョク学院とオスマン時代の県庁の説明と写真、オスマン時代の家屋の写真などを紹介して、家屋の変化と継続性を分析させている。スイヴァスで音楽教育に関わったトルコ民族音楽家、地元で経済的な収入をもたらしている伝統的な手工芸品である靴下とナイフにも言及している。生徒用作業帳にある課題は、生徒の住む県についてその自然、歴史、経済活動、過去との比較で人口と居住、史跡と観光地について調べる学習などである。指導書は、教科書に掲載されている諸資料の活用について例示している。

(小単元「私たちは影響を与えました、与えられました、しかしどのように?」：単元目標6、教科書4頁、3校時展開)

本小単元の目標は、オスマン朝とヨーロッパとの関係の枠で、文化、芸術、美的な理解での相互作用に気付かせることであり、教科書は最初の見開きで、ウイーンでのオスマン使節団が準備した演奏や遊戯施設の説明、オスマン帝国への使節団の受け入れを描いた絵、オスマン軍楽隊の相手へのインパクトの解説、軍楽隊の東欧音楽への影響を説明する囲み記事、15世紀からのヨーロッパでのトルコに対する関心の高まりについての説明、17世紀のヨーロッパでトルコ人のイメージが絵画に反映された様相を示すインターネット画面を掲載している。次の見開きはヨーロッパがオスマン帝国に与えた影響に関して、オスマン帝国の弱体化、ヨーロッパの新文物をオスマン帝国に持ち込んだチューリップ時代、新しいヨーロッパを紹介すべく印刷機械を導入したチェレビ・メフメットについて説明し、当時のイスタンブールの生活様式を反映した風景画などを掲載している。生徒用作業帳にある課題は、オスマン軍楽隊のヨーロッパ人作曲家への影響という内容のインターネット画面を見て、自分の意見や解釈などを記述する学習と、教科書の記載内容も活用してヨーロッパとオスマン帝国の相互作用について整理し、そのことについての自分の考えを記述する学習である。指導書は、オスマン軍楽隊などについての解説、18世紀のオスマン帝国における具体的な刷新や変革についての事項整理、教科書にある諸資料の活用方法についての例示を記載している。

(小単元「旅行者の目からのオスマン文化」：単元目標7、教科書4頁、2校時展開)

本小単元の目標は、オスマン帝国で一時期生活し社会的文化的な生活を観察した人物の記録から、オスマン文化を認識することであり、教科書は、居間とそこでの接待の様子、好みの色合い、天然痘の治療、親子の情愛と尊敬の念などについて記述した外国人の旅行記からの文章、オスマンスタイルの室内や家屋の写真、スポーツと遊技の大会を描いた版画、カフェの店主を描いた絵などを掲載している。生徒用作業帳には、外国人の観察したトルコに関する文書資料を読み、筆者はどのような文化の構成要素に着目したのか、想定した読者は誰なのか、描かれたことが今日でも存在するのかななどの設問に答える課題があり、史料の読み解き方を学習させる題材となっている。指導書は教科書にある諸資料の活用方法について例示しているが、文化の構成要素に着目させ、それについてオスマン時代と現在とを比較させることで、文化の継続性と変容を考察させる指導を強調している。

(小単元「刷新とオスマン帝国」：単元目標8、教科書4頁、2校時展開)

本小単元の目標は、オスマン時代から今日まで変わりながらもその存在を持続させている組織を確実に

例示することと、社会経済的な変化に気付かせることであり、教科書は、チューリップ時代以降軍事分野を中心に行政、経済、教育などの分野で改革が図られたことの説明、新設された主要組織・機構の一覧表、最初の鉄道建設の経緯についての解説、フランス革命に影響されて版図内の民族主義運動が昂揚したことと、タンズイマート勅令や立憲政治の出現などでの政治における刷新の概説を掲載している。さらに、経済改革で創設された農業銀行の農民救済を目的とした設立経緯の説明、アンカラにある同銀行総務局の建物の写真、同建物内にある農業銀行博物館を紹介したインターネット画面も掲載している。生徒用作業帳には、19世紀のヨーロッパで見られた科学技術や政治の発展に連動し、オスマン帝国でも新たな組織や機構が生まれたが、それらについて交通、通信、法律、教育、経済の各分野に分けて具体的な例を挙げる課題がある。指導書は、教科書に記載されている本文や諸資料に関する発問など、それらの活用例を紹介している。

(本単元終了後の評価)

教科書の本単元の最後にある学習評価では、第1問は単元全体にわたる学習内容についての正誤問題7題で、主に学習内容に直結した知識・理解を問うものであるが、発展的に思考力を問う問題も見られる。第2問は単元全体にわたる学習内容についての四択問題であるが、本問においても思考力が評価されている。第3問は生徒が住んでいる都市でトルコ文化と芸術や美的理解に関する事例を取り上げ、その変化と継続性について自分の考えを記す問題や、スレイマン一世になったつもりで、当時の代表的な建築家ミマル・スィナンをねたむものからの訴えにどう対応するのか、自分の考えを書く問題などで、主として思考力・判断力を問う出題となっている。本単元でも、これらの問題のほかにも本単元の要約と単元に関連する生徒用参考文献のリストも記載されている。また、生徒用作業帳でも生徒が3段階で学習の自己評価をするための一覧表が記載されている。本単元の評価項目としては、トルコ民族のアナトリアでの政治闘争や文化活動の例示のほか、セルジューク帝国などのトルコ化への貢献の説明など、単元の目標に対応した合計9項目である。本単元には作業帳に2つのパフォーマンス課題も設定されている。1つは1071年から1453年まで、1453年から1699年まで、1699年から1914年までのいずれかの期間について年表を指示に従って作成するとともに、作業の流れ、学習の体験、出会った困難について作文を書く課題である。指導書に示された評価項目は題目や凡例の適切さ、資料の活用、史実など8項目にわたり、4基準が設定されている。他の1つは、オスマン朝の首都となったブルサ、エディルネ、イスタンブールのいずれか1つを選び、その都市の歴史、文化、芸術、地理について調べて、トルコの観光への貢献が明確にわかるようなパンフレットを作成する課題である。評価項目は目的、歴史などの調査内容、略図での表現、資料の活用などの8項目で、それぞれ3段階での評価となる。

4. 新教育課程による社会科教育の課題

新教育課程による社会科教育の課題を考察するにあたり、まず前述の各単元の授業展開構想から析出できる新課程の傾向・特色を簡潔に整理しておきたい。

新教育課程における「社会科」の基本的な構想は、子どもの活動を学習の中心に据えて社会に積極的に関われる能力を育み、社会の変革や新たな創造を担える公民を育成することであったが、教科書や生徒用作業帳を活用させ、調べ、考え、説明・発表、討論を通じて、情報収集能力、分析力・考察力、意思決定力、コミュニケーション能力を授業の様々な場面で育成できるように工夫されていることが確認できる。また、それらの習得状況を判定するための評価の観点も、旧来から重視されてきた知識・理解だけではなく、関心・意欲、思考力・判断力、表現力といった学力の様々な側面を含めていることがわかる。

こうした学力観の変化は教科書のあり方をも変えていった。旧課程のトルコの「社会科」教科書は、学ぶべき事項を整理した本文と関連する図表が紙面を埋めていたが、新課程では子どもが主体的に学習するための資料集のような役割、換言すると学習材の提示機能に変質したと考えられる。特に歴史学習で

その傾向が如実に表れており、教科書に掲載されている資料はまさに歴史を解釈するための史料となっている。また、生徒の学習意欲や興味・関心を高めるために、教科書の各小單元における最初の頁に、4・5年生では「さあ、考えてみましょう」というタイトルの囲み欄が、6・7年生では課題がそれぞれ提示されている。例えば、「外国人があなたの家へ無断で入ってきたら、どう感じますか」（4年生第2単元の「諸戦線」）や「あなた方の将来のために職業選択をする際、何に注意しなければならないのでしょうか」（6年生第3単元の「私たちが職業を選択する際」）などは特に、生徒に当事者として問題意識を持たせたり、問題の切実さを感じさせ、それぞれの小單元を通じての問題解決を継続させる力となるであろう。

アイデンティティの育成を主たる教育目標としていた旧課程からの変更は、学習内容にも影響したことを指摘できる。旧課程の「社会科」の中心的な学習内容である地理学習と歴史学習は、それぞれ地誌や通史として展開されてきた。しかし新課程では、5年生の外国に関する学習が単なる他国理解ではなく、国際理解教育のテーマとなる異文化理解や地球環境問題などを考えさせる事例として外国を扱っているし、他国とトルコを比較する学習も見られ、他国を鏡として自国を見直す学習も組み込まれている。外国や歴史を事例として取り上げる考え方は、歴史学習にも適用されている。確かに歴史学習の単元構成は通史的な順序立てになっているが、歴史を通じて遺産や文化を学ぶといった、いわば手段としての歴史学習の様相が前面に出ていると言えよう。さらには多文化共生の事例のように、現代社会の課題を歴史学習の中に見出そうとさえしている。ただし、新課程においてもアタテュルク主義育成に直結するような学習内容が取り上げられていたり、アタテュルク主義への言及が適宜見られるように、トルコ人としてのアイデンティティの育成が蔑ろにされているわけではないことにも留意したい。

このように社会科教育の刷新を図った「社会科」の授業展開であるが、問題はそうした新「社会科」の教育理念や目標が学校現場でどの程度実現されうるかである。この点に関して、既に拙稿（2006）が「社会科」教師の育成と入学試験問題対応の観点から言及しているが、前者は畢竟教師の指導力の問題であり、それについては拙稿（2009）で指導書の活用が実践成否の鍵となることに言及した。本稿で取り上げた単元の具体的な授業展開の構想を分析してみると、小單元間の構成や小單元内の展開などで、問題解決の観点から判断して、さらに改良を要する個所が散見するものの、全体としては教科書見開き2頁分を1校時で展開できるように、小単元の目標に対応して必要な学習材や教材を提供しているとともに、相応の学習方法を紹介しているものと筆者は判断している。その点では、教科書、生徒用作業帳、指導書の3点セットの活用で、経験の浅い教師も「社会科」指導の不得意な教師も研鑽を積むことで、新課程の目標になんとか対応できると考えられる。

他方、入学試験対応の課題は依然として問題をはらんでいると危惧される。確かに新課程の「社会科」では、積極的に社会参加できる能力を育成するために必要な様々な学力を想定し、それらをペーパーテストをはじめ多様な形態で評価できるように、評価する観点や基準も示されている。しかし、そうした学力がどれだけ確実に入学試験に反映されるのかは、疑問である。実際、全国一律で行われる中等教育機関入学試験制度（OGES）での全国水準決定試験（SBS）で「社会科」も出題科目となっているが、SBSは四択による記号解答方式で、出題内容が基本的には知識・理解を問うものとなっている⁵⁾。ただし、初等教育学校の成績がSBSでの得点に加算されてOGESでの得点となるように配慮されている。したがって、本論での考察に見るように、校内での生徒の成績については「社会科」の様々な学力が評価されると考えられるので、新教育課程の目標はある程度達成されうるものと期待はできよう。しかし、日本での中学校の社会科学習を想起すると、内申書が入試に併用されるものの、高校入試問題が主として知識・理解や資料活用などの技能を評価する出題内容になっている現実からは、知識・理解や技能以外の学習指導要領が掲げる学力が学校現場でどれほど重視されているのかは、疑問である。日本と同様トルコにおいても、入学試験が初等教育学校での授業実践に影響をもたらすだけに、入試対応の課題は新課程の教育目標を達成させる鍵となっている。

5. おわりに

新教育課程のもとでのトルコの「社会科」の授業展開は、社会の変革や新たな社会の創造を担える公民を育成する社会科教育に重点が置かれていると筆者は結論付けたいが、まとめにあたり、トルコ人としてのアイデンティティ育成を目指した従前の教育課程から、何故こうした新たな動向に転換を図ったのか、その背景や意義を一瞥してみたい。

社会科教育刷新の実現の背景に「2004年国民教育省社会科教育計画」があるが、それはEU加盟交渉でトルコが突きつけられた民主化と人権改革の課題を解決する一手段であったと推察された（拙稿、2006）。実際にそれを裏付けるものとして、丸山（2006）が、トルコにおける近年の一連の教育改革がEU加盟交渉を契機にしていることを指摘している。また、新課程の「社会科」教育で目指される学力は、日本の平成20版学習指導要領で想定するいわゆるPISA型学力に通じるところがあるし、トルコでも2003年からPISAに参加している。「社会科」の授業展開が目標通りに達成されれば、まさにEU並みの社会科教育の水準に到達することを意味し、EUの加盟交渉における大きな切り札となることが予想されるばかりか、主体的に社会参加する公民の出現がトルコの民主主義を支え、トルコが目指してきた世俗主義を名実ともに実現することになるものと考えられる。

注

- 1) イブン・シーナー（980～1038）はブハラ近郊に生まれたイスラム哲学者・医学者。アリストテレスの形而上学研究を手がけ、彼の存在の研究は後期イスラム思想家たちに継承されて開花した。また、彼の医学書はラテン語に翻訳されて、西欧の医科大学の教科書に使用された（日本イスラム協会、1982, p.103）。
- 2) 指導書の本小単元末には、シルクロードについての解説が記載されており、教師の学習指導に便宜がはかられている。同所には他に、軍艦エルトゥールル号や世界七不思議についての解説と観光週間や博物館週間の際の学習活動事例も紹介されている。
- 3) GAPの詳細については、拙著（1999, pp.180-187）を参照。
- 4) バルカン領土の拡大により、征服地のキリスト教徒の優秀な子弟をイスラム教徒として改宗させ、特殊な訓練を施して育成した、君主の側近に奉仕する忠誠な奴隷身分の軍団。当初はオスマン帝国軍の精鋭として王朝の発展に貢献した。新たな戦力の補給とバルカン諸民族の同化が目的であったとされる（日本イスラム協会、1982, p.77）。
- 5) SBSは、第6学年から第8学年までの学習内容が出題され、出題教科は、「トルコ語」、「数学」、「理科と技術」、「社会」（第8学年での出題教科は「社会科」ではなく、「トルコ共和国の革命史とアタテュルク主義」と「宗教文化と道徳」）、「外国語」である。出題内容と解答はインターネットで開示されている（http://oges.meb.gov.tr/sbs_groru.htm）。

引用文献

- 日本イスラム協会監修（1982）：『イスラム事典』平凡社
- 丸山英樹（2006）：「トルコの教育改革－欧州水準を目指した量的拡大と世俗主義維持の機能－」『国立教育政策研究所紀要』第135集, pp.137-151.
- 拙著（1999）：『トルコの見方－国際理解としての地誌－』二宮書店
- 拙稿（2006）：「トルコにおける社会科教育の動向と課題－教科「社会科」を手がかりに－」『社会科教育研究』第98号, pp.84-92.
- 拙稿（2009）：「トルコにおける新教育課程での地理教育の動向」『横浜国立大学教育人間科学部紀要I（教育科学）』第11号, pp.109-122.